

【解答時間 90 分】

○次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

冷戦終結後、世界は一時的に米国を中心とする一極秩序を経験したが、今やその時代は過去のものとなりつつある。現代の国際社会は、米中対立を軸としながらも、インドや東南アジア、アフリカ諸国といった「グローバル・サウス」が独自の存在感を示す多極化の時代へと突入している。ここでの多極化とは、単に軍事的な「力の拠点」が分散しただけではない。それぞれの国が掲げる「利益」と、それを支える独自の「価値」が複雑に交錯し、一律のルールで世界を律することが困難になった状態を指している。

(中略)

現代の多極化秩序において、多くの国々は単一の陣営に身を投じることを拒んでいる。彼らは、経済的には中国との連携を強めながら(利益の体系)、安全保障では米国との協力関係を維持し(力の体系)、その一方で欧米的な人権観とは異なる独自の統治原理(価値の体系)を堅持しようとする。

このような多層的な国家関係が並立する状況は、国際社会における「平和」の定義を根底から変容させている。高坂正堯が指摘したように、国家が力・利益・価値の三つの側面からなる複合物であるならば、現代の秩序構築とは、これら三つのレベルにおける摩擦を絶えず調整し続ける終わりのないプロセスに他ならない。しかし、われわれは依然として、複雑な問題を特定の「悪役」に帰せしめ、それを除去すれば平和が得られるという(a)「知的な怠惰」から脱しきれていない。

多極化する世界において、安定的な秩序を構築するためには、自国の「常識」や「正義」が唯一絶対のものではないことを認める謙虚さが求められる。一極集中から多極化への移行に伴い発生する(b)巨大な「力の真空」を、単なる覇権争いの場とするのではなく、異なる価値体系の対等な対話の場へと変容させることができるか。この難問を解くためには、安易な二元論を排し、多極的な「利益の体系」が織りなす複雑な依存関係を戦略的に管理する高度な知的労働が必要とされている。

問1 下線部(a)について、筆者が述べる「知的な怠惰」とは具体的にどのような態度を指すか。文章中の語句を用いて、180字以内で説明しなさい。

問2 下線部(b)について、現代の国際情勢において「力の真空」はなぜ発生すると考えられるか。筆者が述べる一極集中からの変化に触れながら、200字以内で説明しなさい。

問 3 多極化が進む現代の国際社会において、安定した秩序や平和を構築するために、日本はどのような役割を果たすべきだ考えるか。本文の内容やこれまでの学習をふまえ、具体的な事例を一つ挙げながら、あなた自身の考えを 600 字以内で述べなさい。